

や たか はら い せき
矢 高 原 遺 跡

貸事務所建設に先立つ埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

1992年3月

長野県飯田市教育委員会

矢 高 原 遺 跡

貸事務所建設に先立つ埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

1992年3月

長野県飯田市教育委員会

序

近年の考古学ブームはといわれるなかで様々な調査・報告がなされていますが、考えてみればそれだけ地域における開発等が進んでいることの裏返しだと思います。

飯田市においても公共事業や民間開発に伴う発掘調査が増大しており、先人たちの生活の様子を示す事実をつぎつぎと確認しております。これらの事実ひとつひとつの積み上げが歴史となるわけです。

今回発掘調査した矢高原遺跡は、以前調査し平安時代の集落址を確認した猿小場遺跡に隣接した場所であり、それにつながるなんらかの造構が確認できるものと期待していましたが、平安時代に關係する造構は確認できませんでした。しかし、この結果から猿小場遺跡の集落址の範囲がわかったともいえます。

内容については、本文中に記したとおりであり、今後の研究に供されることを希望しております。

発掘調査といえども文化遺産の破壊にちがいないのです。できることならば、今までそうだったように、残っているままの姿で後世に継承していくことが私たちの責務だと感じています。しかし、現在生きている私たちにも生活があり、地域全体における今日的な課題解決の必要もあるわけです。そのためにはやむをえない部分もあるとは思います。地域社会の発展と文化財保護とがうまく調和のとれた地域にすることがこれから重要な課題だと考えます。

最後になりましたが、調査実施にあたり、その趣旨を深いご理解をいただいた有限会社勝間田商事と、猛暑の中での発掘作業や細かい整理作業に従事していただいた作業員の皆様に心よりの感謝を申し上げて、刊行の言葉といたします。

平成4年3月

飯田市教育長

小林 恭之助

例　　言

1. 本書は有限会社勝間田商事の貸事務所建設に伴う埋蔵文化財包蔵地矢高原遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は有限会社勝間田商事の委託を受け、飯田市教育委員会が実施した。
3. 調査は平成2年6月18日～28日まで実施した。続いて平成3年度末まで整理作業及び報告書の作成作業を行なった。
4. 発掘調査及び整理作業においては、遺跡名をYTHとした。
5. 本書の記載は、遺構図を本文に併せて挿図とし、遺物及び写真図版は本文末に一括した。
6. 本書は吉川が執筆した。なお、本文については一部小林が加筆・訂正を行なった。
7. 本書の編集は、調査員全員で協議により行ない、小林が総括した。
8. 本書に関する出土品及び諸記録は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館に保管している。

本文目次

序	
例 言	
目 次	
I 経 過	1
1 発掘に至るまでの経過	1
2 発掘調査の経過	1
3 整理作業の経過	1
4 調査組織	2
II 遺跡の環境	3
1 自然環境	3
2 歴史環境	3
III 調査の結果	9
1) 土 坑	9
土坑 1 土坑 2 土坑 3 土坑 4	
2) 溝	10
溝 1	
3) そ の 他	10
(1) 柱 穴 群	
(2) 遺構外出土遺物	
IV ま と め	14
V 引用参考文献	15

挿 図 目 次

挿図 1 調査遺跡および周辺遺跡位置図	5
挿図 2 調査位置図および周辺地図	6
挿図 3 遺構分布図	7
挿図 4 土坑 1・2・3・4	9
挿図 5 溝 1	10
挿図 6 柱穴群	11

図版目次

第1図 土坑および遺構外出土遺物	18
------------------------	----

写真図版目次

図版1 調査区全景	20
図版2 土坑2・3・4	21
図版3 土坑出土遺物	22
図版4 遺構外出土遺物	23
図版5 作業風景	24

I 経 過

1. 発掘に至るまでの経過

矢高原遺跡は飯田市鼎名古熊に位置している。鼎地区は飯田松川の河岸段丘上に発達した地区であり、大きく分けてその段丘は4段にわけられる。そして、矢高原遺跡は上段と下段の間に位置する小段丘である。

この段丘上は水の便が良くないため、宅地化が進んだのは近年になってからで、段丘の東半分には、市営・県営の住宅が建っている。それ以前は、桑園があるのみで道路の整備も行われていなかった。現在残っている農地は西よりに一部あるのみで果樹園を中心となっている。

この段丘上に昭和55年長野県飯田長姫高校が建設され、それに先立つ発掘調査により弥生時代後期・平安時代・中世の集落跡が確認され、それぞれの時代において重要な遺跡として位置づけられていた。その隣接地に勝間田商事が貸事務所の建設を計画し、遺跡保護等の対応が必要となった。

今回、この地に貸事務所の建設を始めたのは、一般国道153号飯田バイパスが上段を通過し、それにつながる都市計画道路が整備されれば、現市街地及び飯田インターへの交通の便がよくなることが一番の原因と考えられる。

建設計画地は埋蔵文化財包括矢高原遺跡として登録されている。隣接地である猿子場遺跡の状況や地形などを勘案するなかで、長野県教育委員会文化課、建築設計社、および飯田市教育委員会の3者で現地において協議した結果、用地内の建物部分を全面発掘調査することとした。

2. 発掘調査の経過

平成2年6月18日、協議に基づき発掘調査に着手した。方法は建物部分を重機により表土の剥取りを行なうこととしたが、用地が狭く排土の都合上2回に分けて実施することにし、初めは調査区の東側半分のみの調査となった。遺構検出・掘下げ・実測が終了後、土を返し西側半分の調査に移った。

用地の西端にあたる用地の境に基準点をおき、北端の用地境を結ぶ軸を基本にして、2m方眼のグリッドを設定した。この基軸は北に対して、72°20'西を針している。遺構の実測はこのグリッドを使って行なった。6月28日はすべて現地作業を終了した。

3. 整理作業の経過

平成3年度に、飯田市考古資料館において実施した。出土遺物の水洗い・注記・復元について、それらの実測・写真撮影を実施した。

また、造構図・造物の実測図のトレースも同時に行ない、原稿執筆、図版組みを行ない、報告書の刊行となつた。

4. 調査組織

(1) 調査団

調査担当者	小林 正春	佐々木嘉和	佐合 英治	馬場 保之	渋谷恵美子
調査員	吉川 豊	今村 春一	大島 利男	木下 傳	木下 当一
	市瀬 長年	窪田多久三	坂下やすゑ	清水 三郎	高木 義治
	北村 重実	高橋収二郎	滝上 正一	豊橋 宇一	中平 隆雄
	細田 七郎	正木実重子	松下 成司	松下 真幸	松下 直市
	松島 卓夫	森 章	矢沢 博志	吉川 正実	
	井原 恵子	池田 幸子	大藏 祥子	金井 照子	金子 裕子
	唐沢古千代	唐沢さかえ	川上みはる	木下 早苗	木下 玲子
	梅原 勝子	小池千恵子	小平不二子	小林 千枝	渋谷千恵子
	田中 恵子	筒井千恵子	丹羽 由美	萩原 弘枝	原沢あゆみ
	林 勢紀子	堀本 宜子	平栗 陽子	福沢 育子	福沢 幸子
	牧内喜久子	牧内とし子	牧内 八代	松本 恵子	三浦 厚子
	南井 規子	宮内真理子	森 信子	森藤美智子	吉川 悅子
	吉川紀美子	吉沢まつ美	若林志満子		

(2) 事務局

飯田市教育委員会

竹村 隆彦 飯田市教育委員会社会教育課長 (平成2年度)

安野 節 " (平成3年度)

中井 洋一 飯田市教育委員会社会教育課文化係長

小林 正春 飯田市教育委員会社会教育課文化係

吉川 豊 "

馬場 保之 "

渋谷恵美子 "

篠田 恵 "

II 遺跡の環境

1. 自然環境

矢高原遺跡は飯田市鼎名古熊に位置する。鼎地区は昭和59年12月の飯田市との合併により、行政区画上、飯田市鼎となった。鼎地区は、飯田市街地とは南西側を流れる飯田松川と対峙する位置関係にあって、西側では伊賀良地区に、南東では松尾地区に境を接した細長い地区である。

地形を概観すると標高500m前後に伊賀良地区を形成している大扇状地の扇端があり、それより東側が鼎地区である。鼎地区全体としては、飯田松川の河岸段丘上に立地している。この段丘は大きく、一色と名古熊地区の一部のある最上段、名古熊地区のある上段、切石から上山まで続く中段および上茶屋から下山・東西鼎まで延びる下段の4段にとらえられるが、各所に微地形による変化も見られる。

矢高原遺跡は前述の河岸段丘でいえば、上段と中段の間にある小段丘の上にある。この段丘は矢高諏訪神社付近から始まりは緩やかに傾斜しながら東へ延びている。その先は段丘崖になっており比高差は約30mで、下位の松尾久井・八幡町の段丘面になる。北側は鼎地区的下段と接し比高差は約40m、南側は比高差約15mで上段となる。標高はこの段丘のほぼ中央である飯田長姫高校で466.50mである。

2. 歴史環境

鼎地区は河岸段丘上に発達した場所であり、各段丘上に先人の生活した痕跡が認められている。それらを時代を迫って概観してみる。一部松尾地区も含む。

旧石器時代に比定される遺跡はないが遺物としては、天伯B遺跡・猿小場遺跡からナイフ形石器が、また上段にあたる八幡原遺跡では彫器が出土している。

縄文時代では各時期の資料があり、早期は天伯A遺跡などで押型文土器片のほかいくつかの資料が知られているが、不明な点が多い。

前期に入ると集落の実態を示す資料が得られている。田井座遺跡では竪穴式住居址を確認している。また、八幡原遺跡でも2軒の住居址と確認している。

中期としては、天伯A遺跡のほか日向田遺跡、柳添遺跡、代田遺跡等各所で良好な資料を得ている。

後期・晩期は断片的な資料を得ているのみで、遺構を伴う例はほとんどない。六反畠遺跡でも土器の出土はあったが遺跡確認できなかった。

弥生時代においても集落立地は基本的に前時代と変わらず、湧水線を利用した水田経営と陸

耕を基本としていたものと考えられる。特に後期には山岸遺跡・天伯B遺跡の大集落が存在する一方、田井座遺跡・一色遺跡・猿小場遺跡などの小規模集落の存在が知られるなど、2面性があり、典型的な当地方の様相を示している。

弥生時代の墓制である方形周溝墓は弥生時代の各遺跡で確認されているが、八幡原遺跡の崖縁部には、古墳時代へつながる各種の墓形態を確認した。

古墳時代は山岸遺跡・天伯B遺跡・柳添遺跡・黒河内遺跡・六反遺跡において集落址が調査され、当地方における古墳時代の集落のひとつの在りかたを示している。古墳としては、調査を行った物見塚古墳は現在市立病院の用地内にあったもので築造形態が特異である。同じく調査した妙見山古墳は方墳であった。この段丘上には前方後円墳である御射山獅子塚と段丘崖縁部には茶柄山古墳群の所在が知られている。鼎地区の中段で、矢高諏訪神社の北側、矢高稲荷神社付近に現存する鞍骨古墳は石室のみである。その他にも鼎地区には12基が知られているが、調査されていないため、詳細は不明である。

平安時代の遺跡としては猿小場遺跡・日向田遺跡・八幡原遺跡が調査されており、猿小場遺跡では、8世紀後半を中心に25軒の竪穴住居址が検出されている。

中世に入ると鼎に関する記録は残っていないが、この地区は伊賀良庄の一部に含まれるが、室町時代には、松尾に居を構えた小笠原氏の支配下に入ったものと思われる。名古熊諏訪神社の付近には田中館あった伝えられることから考えて小笠原氏の繁栄の基盤をなしていたことに疑う余地はない。と同時に、鼎地区各所で中世の陶磁器が採取されることも注目したい。



- | | | | | |
|---------------|-----------|-----------|-----------|-----------|
| 1. 矢高原遺跡 | 2. 鰐小場遺跡 | 3. 八幡原遺跡 | 4. 名古熊下遺跡 | 5. 一色遺跡 |
| 6. 田井座遺跡 | 7. 日向田遺跡 | 8. 六反畠遺跡 | 9. 柳添遺跡 | 10. 黒河内遺跡 |
| 11. 山岸遺跡 | 12. 天伯B遺跡 | 13. 天伯A遺跡 | 14. 西の原遺跡 | 15. 岷原遺跡 |
| A. 御射山獣子塚 | B. 茶柄山古墳群 | C. 炙見山古墳 | D. 物見塚古墳 | E. 鞍骨古墳 |
| F. 雷大塚古墳(遠隔台) | | | | |

插図1 調査遺跡および周辺遺跡位置図



図2 調査位置図および周辺地図

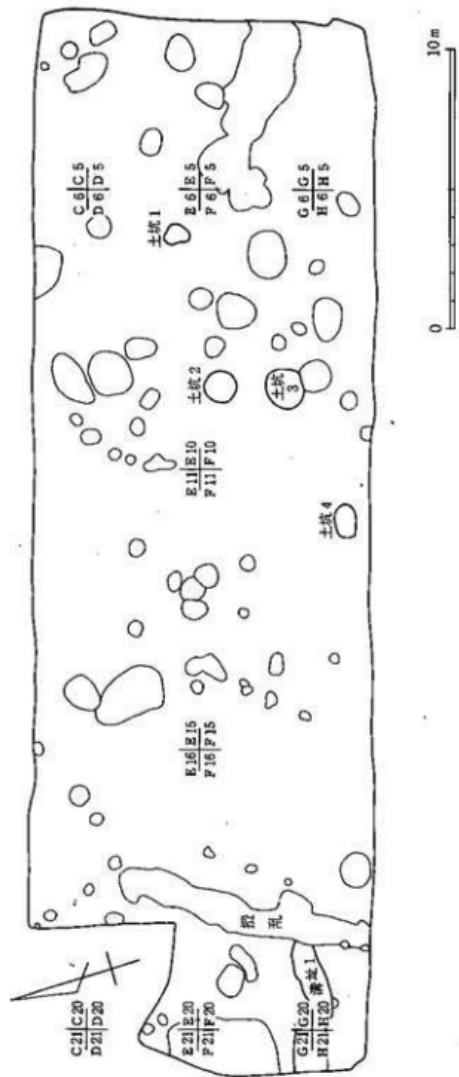


図3 造構分布図

III 調査の結果

1. 土 坑

◇土坑1（挿図4・第1図）

調査区の東寄り、E 6 グリッドで検出した、 $0.9 \times 0.7\text{m}$ の不定形の土坑である。底は中央がやや窪んでおり最深部で21cmを測る。壁は西側がほぼ直角に掘られているが、それ以外は比較的急角度である。

暗褐色の覆土からは、縄文時代のものとみられる土器片（第1図1）が出土しているが、時代の特定はできなかった。また、性格も不明である。

◇土坑2（挿図4・第1図）

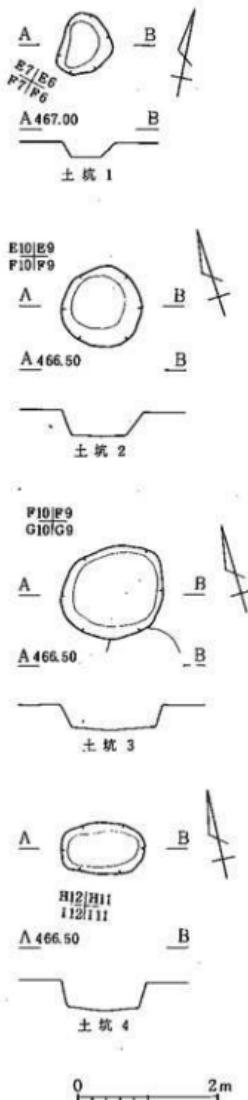
調査区ほぼ中央、F 9 グリッドで検出した、直径1.1mの円形の土坑である。底は中央がやや窪んでおり、38cmある。壁は北側でほぼ直角に掘られているが、南側は比較的急角度に掘られているため、底部がやや北に寄っているように見える。

覆土は漆黒土であったが、中ほどに焼土が入っていた。遺物は縄文時代のものとみられる土器片（第1図2・3）が出土しているが、時期・性格とも不明である。

◇土坑3（挿図4・第1図）

土坑2の南側、G 9 グリッドで検出した、 $1.4 \times 1.3\text{m}$ の楕円形の土坑である。南側は別の穴と切り合っているが新旧関係は不明である。底部は中央にやや窪んでおり、最深部で38cmを測る。壁は底部からそのまま立ち上がっている状態であるが、ほぼ直角に立ち上がっている。

漆黒土の覆土からは縄文時代のものとみられる土器片（第1図4・5）が出土しているが、時期・性格とも不明である。



挿図4 土坑1・2・3・4

◇土坑4（挿図4）

調査区の中央付近、南側の用地境、H11グリッドで検出した、 $1.2 \times 0.8m$ の長楕円形の土坑である。底部は中央部がやや窪み、深さ46cmを測り、壁はほぼ直角に掘られている。

漆黒土の覆土から、遺物の出土はなかったため、時期・性格は不明である。

2. 溝

◇溝1（挿図5）

調査区の西端ではほぼ東から西に延びる幅1.2mの砂を覆土とする溝を検出した。東端は攢乱により切られ、西側はさらに用地外へ延びるものと見られる。したがって、全体が調査できなかったため、その全容はわからない。調査できた部分は全長4.7mであり、中央付近で2分かれている。中央東側には $1.4 \times 1.0m$ の椭円形の落ち込みがあり、

29cmの深さがあり、徐々にではあるが東に向かって上勾配を示しており、東端の攢乱との切り合部分での深さは8cmと浅くなる。底部はやや中央が低くなっている。壁は緩やかに立ち上がっている。また、中央西側では深さ17cm程度であるが比較的急角度に立ち上がっている壁際に穴が2個ある。さらに西側の用地境付近では大きく落ち込んで深さ34cmとなる。この深さで用地外へ続くものと見られる。

覆土からは遺物の出土ではなく、時期は不明である。また、覆土である砂は、水流により運ばれたものと見られるが、一部のみの調査では自然の水流なのか、人為的な溝なのかは判断できない。

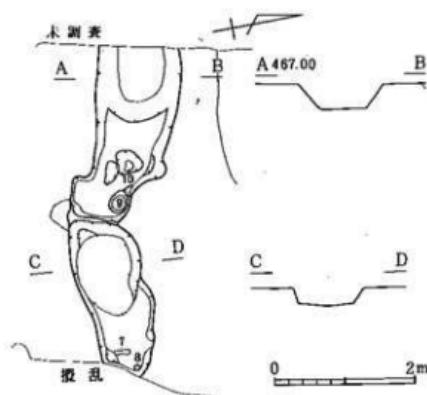
3. その他の

1) 柱穴群（挿図6）

調査区全域で柱穴を確認した。平面形、規模、覆土等に統一感がなく建物址とはならないものと判断した。これらの中には耕作による攢乱なども確認できるが、ひとつずつの性格や時期の判断は困難である。

2) 遺構外出土遺物（第1図）

前述の遺構に伴わない遺物は、調査区全体から出土しているが、量は比較的少ない。土器



挿図5 溝1

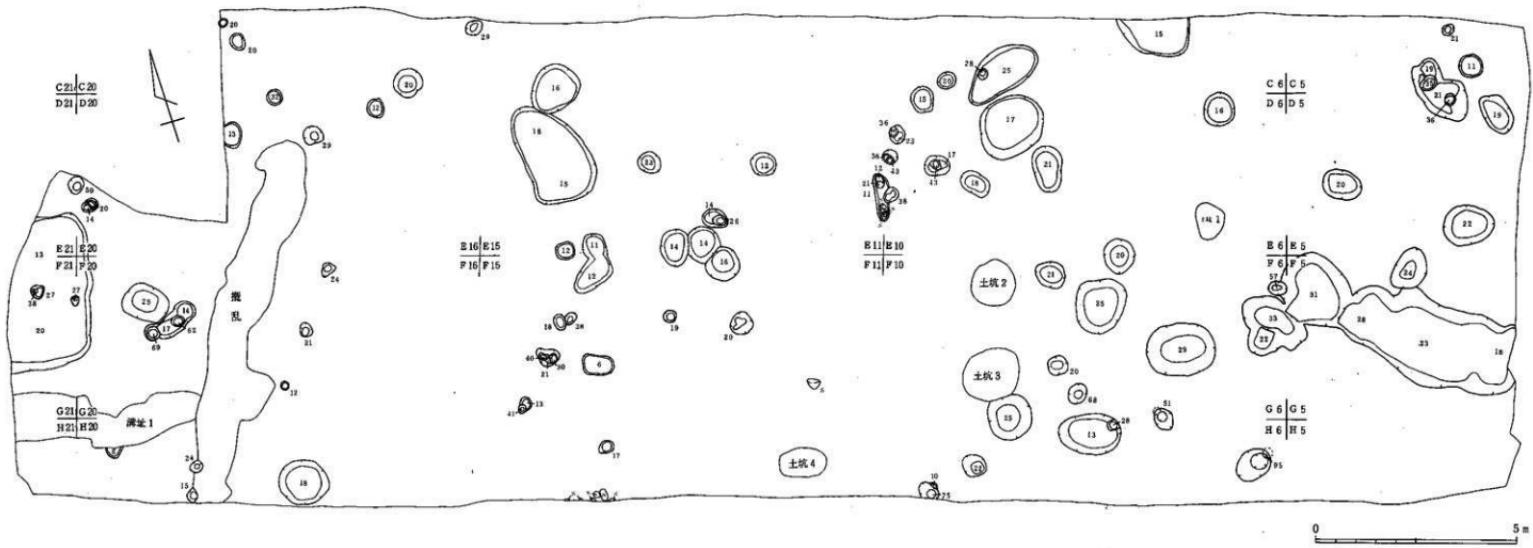


图 6 柱穴群

は小破片のみであり、その量もごくわずかである。石器はほとんどない。

黒耀石が出土している。(第1図12)また、石器としては硬砂岩製の横刃形石器と見られるものが2点のみである。(第1図10・11)

土器は、小破片のため掲載できなかったが、縄文時代中期と見られる。土師器の整底部(第1図6)には範磨きが残る。山茶陶系の皿(第1図7)と大平鉢(第1図8)は中世と思われる。さらに、近世陶器としては壺(第1図9)の破片がある。その他に図化できなかつたが摺鉢もある。

IV ま　と　め

今回の調査経過は以上のとおりであるが、調査対象が建物の範囲と限定されたものであり、断片的な事実を知り得たのみといえるため、遺跡の総体については周辺一帯を含めた考察が必要である。

長野県長姫高等学校建設に先立つ猿小場遺跡発掘調査において確認できた平安時代の集落址は今回の調査地点から東へわずか75mであるにもかかわらず、本地点では平安時代に関する遺構および遺物の出土はなかった。平安時代の集落の範囲外なのか、集落の中央に拡がる広場的スペースとも考えられる。しかし、今回の調査および今までの調査を併せて考えても、結論を得る事はできなかった。さらに近隣の調査結果を待ちたい。

また、昭和57年度に実施した矢高公園建設に先立つ発掘調査で確認した大きな礫を含む溝址も本地点までは及んでいないことが確認できたが、水路の確定はできない。

遺構出土上の遺物は各時代にわたっているが量が少ない。付近にそれぞれの時代に関するなんらかの遺構の存在が考えられるが、今回の調査のみでは把握できない。この地点で確認した土坑および溝についても、ある時期に人間が生活をしていたことを示す物であることに間違いはないが、それらに伴う遺物がなかったため時期および性格の決定ができない。

以上、今回の調査について概要を記し、現段階におけるいくつかの推定を行なったが、遺跡全体の具体的な姿は、周辺部の発掘調査等による事実の集積が不可欠であり、今後に課せられた課題は多大である。

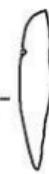
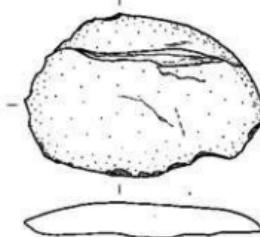
最後になりましたが、文化財保護に深いご理解とご協力をいただいた地区の皆様や有限会社勝間田商事に対して感謝の意を表する次第です。

V 引用参考文献

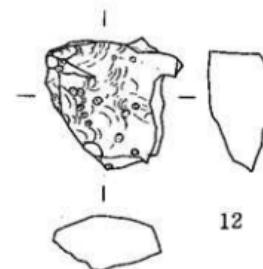
- 中央道遺跡調査会 1975『中央道調査報告－下伊那郡鼎町その2－』長野県教育委員会
鼎町教育委員会 1975『下伊那郡鼎町天伯A遺跡』
飯田市教育委員会 1980『猿小場遺跡』
鼎町教育委員会 1983『矢高原・八幡原遺跡』
鼎町教育委員会 1984『鼎町黒河内遺跡』
鼎町教育委員会 1984『鼎町一色・天伯B遺跡』
飯田市教育委員会 1985『日向田遺跡』
飯田市教育委員会 1988『田井座遺跡』
飯田市教育委員会 1990『日向田遺跡II』
飯田市教育委員会 1989『六反畠遺跡』
飯田市教育委員会 1991『田井座・一色・名古熊下遺跡』
下伊那史編纂委員会 1991『下伊那史 第1巻』
下伊那史編纂委員会 1955『下伊那史 第2巻』
下伊那史編纂委員会 1955『下伊那史 第3巻』
下伊那史編纂委員会 1955『下伊那史 第4巻』
鼎町史編纂委員会 1986『鼎町史』
飯田市教育委員会 1989『物見塚古墳現地見学会資料』
飯田市教育委員会 1991『柳添遺跡現地見学会資料』
飯田市教育委員会 1991『八幡原遺跡現地見学会資料』



図版



0 10 cm



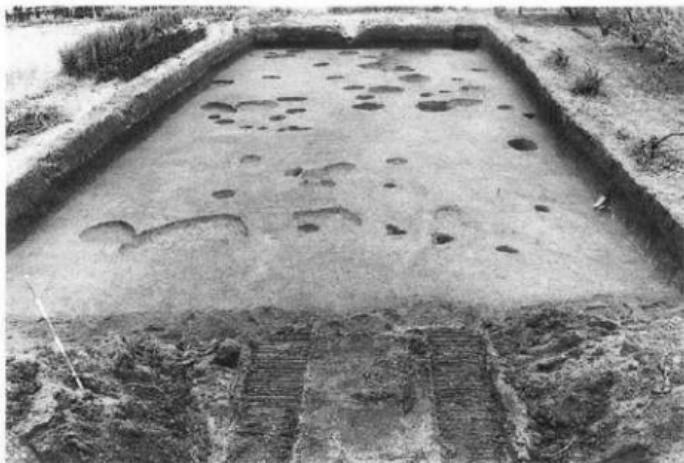
0 5 cm

第1図 土坑および遺構外出土物

(1、土坑1 2・3、土坑2 4・5、土坑3 6~12、遺構外)

写 真 図 版

調査区全景



調査区東側（西より）



調査区西側（東より）

土 坑



土坑 2



土坑 3



土坑 4

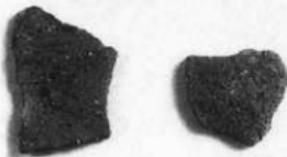
土坑出土遺物



土坑 1

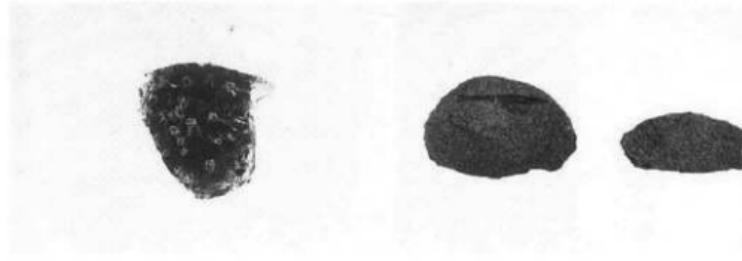
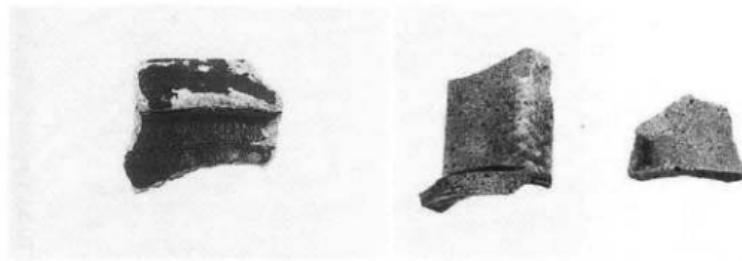
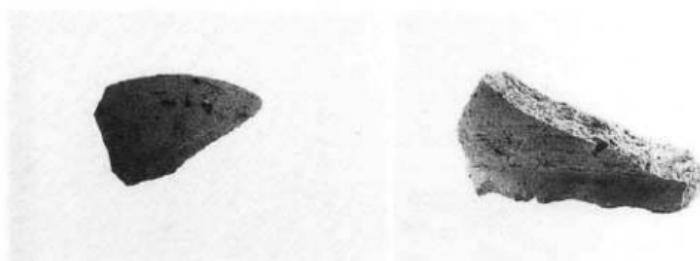


土坑 2



土坑 3

遺構外出土遺物



作業風景



重機による表土別ぎ



検出



道構掘下げ

矢 高 原 遺 跡

貸事務所建設に先立つ
埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

1992年3月 発行

編集・発行 長野県飯田市大久保町2534番地
飯田市教育委員会
印 刷 株式会社秀文社

